



TITLE:

[紀]伊水[道]津浪の古記録(二)

AUTHOR(S):

如舟老人

---

CITATION:

如舟老人. [紀]伊水[道]津浪の古記録(二). 地球 1925, 4(1): 78-81

ISSUE DATE:

1925-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182966>

RIGHT:

談 叢

紀伊水道津浪の古記録(一)

如 舟 老 人

紀伊水道の海底に起る地震には往々津浪を伴ひ紀伊阿波及び攝津和泉の沿岸に大損害を與へたがその正確な記録に乏しく、殊に寶永津浪に關する材料の徴すべきものは紀州田邊藩田所氏の記録だけが大本日本地震史料に收載されてるに過ぎぬ。この頃大阪鹿田書林から『雨窓茶話』と題する小冊子を獲て初めて有田郡湯淺灣内の當時の狀況を知ることが出來た。

奥書によればこの書の著者は同郡廣村の古田豊林にて嘉永五年壬子冬十一月一日の日附があり、その全文は左の如し。

寶永四年丁亥冬十月四日廣湯淺にありしこと

人々いひ傳ふといへども、其詳なることを聞くことを得ざりしが、頃る廣栗山氏に其記録ありて其詳説を見ることを得たり。栗山氏の老人長之右衛門と云は予妻の祖父にて予も又識るに及べり。其老人の慈母廿五歳の時にて有しと云、其記云。

其日は好天氣にて小六月とも可謂日和にてありしが、にわかに大地震して地も破裂に至り家なども倒るゝ程にて、誰言ふとなく高浪あがるとて老幼家物を所縁の方へあづくる人も多かりき。

既に午の刻に至りすわ高浪と立騒ぎ、湊邊の者は鳥の森通りを走り西の丁邊は八幡の段え走りたりしが、最早川筋を浪上りて段え上ること不叶。その比安樂寺は建立あつて三四年なれば人々たしかに思ひ此寺へ逃入り堂上に浪を避ることを夥し。

一番浪よりは二番浪高し。舒々として來るを以て善走るものは浪を負て免るゝを得べし。其去ること至てはげしく一番と二番との間に鳥の

森より八幡の段え走り行とて鳥井下にて引浪に  
巻取られし者有しと云。二番浪の高かりしにて  
安樂寺の堂鐘樓も引倒され夥き人を失せり。廣  
の地面凸なれば酒屋藤助の家は床迄浪上り、栗  
山氏は簀より三尺高く上りたり。浪は谷の淵迄  
行と云。

湯淺は廣より輕し。然れども新屋敷濱町には  
死人あり。中町大坂屋三右衛門の宅はあつら石  
迄浪上りしなり。川通りは別所村迄上り家三軒  
流失す。栖原村は湯淺より輕し、少し破損あり。  
田村は何事もなし。西廣村は餘ほど浪上り流失  
の家あり死人なし。唐尾も西廣と同じ。白木小  
浦同じ。

三番浪は小さく物を害せず。

其夜は恙なき家も男子なき宅は其まゝ逃去り  
しまりもせず見廻りの人なければ盜賊に家財を  
失もの多しと云。家流亡して足を託するところ  
なきものは、公より段の丁へ假長屋を建させ寓  
住せしめ一人に麥四合づゝ十月十九日より賜  
ふ、且繰車なども賜り糸造る。

廣西の波戸（朱註波戸長さ百二十間横脚十三  
間）は此高浪より三四年前 官より築成した  
まゝ西の洲崎へ新畑など地開きせし翌年右の  
浪にて波戸亦壞崩せり。其後土人發願して寛  
政年間再築す。今の波戸是なり。向ひ波戸は  
文化年間に成る。廣橋本與兵衛の家は高浪に  
流れず。栗山氏の宅も此を免る。今の大厦に  
比すれば柱礎甚だ孱弱なれども其頃の家にて  
は大厦にてありしと見ゆ。然れば其時流亡せ  
し家は皆小屋にて柱礎も堅からず、地震にて  
先づ殘ふ家も多かりしなり。

廣村八百五十戸 宇田村トモ 其内七百戸流亡百五  
十戸破損、土藏九十箇、其内七十箇流亡、廿  
箇破損、船十二艘流失、橋三所流失、其餘所  
亡者 官倉二戸 米二石四斗四分 制札代官所 其比ハ  
源寺ノ境内ナリ。公ノ別宮アリ。別宮ノ  
源寺ノ代官所モ其マ、ナリ。郡寄合所家藏トモ 前住還  
ノ路傍ニアリ。郡中  
諸帳面諸手形悉失之 大破 死者男女百九十二人  
十月十四日マテ 又男女百人 何地ノ人トモ知ガタキモノ札  
シレタルモノ 又男女百人 ナ建合葬ス其内二年六十バカ  
タルアリ庄屋ト肝煮ノアヅカリトナル 牛一疋

湯淺村五百六十戸其内二百九十二戸流亡、五十五戸破壊、二百十六戸破損、土藏六十六箇其内三十箇流亡、四箇クヅル、三十二箇破損、船七十六艘流亡、網十七張流失、

官倉二戸破損藏納廿七石七斗ヌレル  
食麥十七石五斗ヌレル

制札三ヶ所、橋三所流失、死者男女四十一人

外二十二人何地ノ人トモ  
知レガダキ者此ノ惠美須社神主流亡、

南ノ惠美須社無恙南ノ惠美須今ハ滋ニアレドモ此時ハ  
今モトエビスト云所ニアリタルナリ

此處ハ濱ヨリ隔リ  
地モ高シ故ニ害ナシ

廣湯淺官ヨリ粥ヲ賜ヒタル者凡八百人小屋入

リ二百九十六人廣村二百四十三人湯淺村

西廣村六十八戸其内四十九戸流亡十九戸破壊

船一艘流亡、官倉流亡貸麥八  
石四斗半二匹流死、死者

男女十一人コレハ何地ノ人トモ知レサルモ  
ノ西廣唐尾ヘ打アガリタルナリ

唐尾村二十三戸其内十九戸流亡三戸破壊土藏

二箇船一網二張 官倉流亡貸麥三  
石五斗

三保川衣奈浦杯ハ高浪ハカリニテ破損ナシ

和田村家一戸流亡

白木小浦一戸破壊船一橋一流亡

別所村三戸流亡何地ノ者トモ不知女一人流  
寄ル、土葬ニシテ札ヲ立

栖原村十七戸二戸流亡五戸破壊十戸破損

廣村其比は關東の漁獵繁昌して民家千餘戸ありしとなり。此の年九月家並の印形帳に八百九十六戸としるしたり。其外に村役人十戸他處よりの寓居杯凡千戸はありしなり。

廣村の戸數減じたるは全くこの高浪に舉族流死したるもの多きなり。先年池永久五郎話に廣村に五六輩夜話の折から高浪の昔かたり出たるに久五郎衆にむかひ、其變に人多く失ひたりといへども誰が先祖の死したりと云ふことも未聞れば今言程の事にてもなかりしならんと云ければ、坐上に其浪に溺死したる子孫三人迄ありしとぞ。是一話にても多く流死せしを推知すべし。

以上雨窓茶話をそのまゝ紹介したので明かなる如く、寶永四年大地震の時に紀伊水道に起つた津浪は頗る烈しく、田邊町田所氏記錄に擧げたのよりも遙かに大きな損害を廣湯淺兩村に與へた事實が明かとなつた。同日の津浪三回の中第二回が最も高かつたといふ記事は大に注意す

べきで、土佐の方では第三回が最も高かつたといふの趣を異にしてゐる。

尙ほ此の地變が誘因となつて廣村から九十九里濱への漁獵に出掛ける移民の盛んとなつて、廣村は湯淺村よりも戸數を減じ、その代りに銚子港に於ける醬油製造業が殆んど全く廣村からの出稼人によつて發展したことは地震國たる日本に於て見る居住地理學の面白い實例である。

### 萬國地理學會議

萬國地理學會議は萬國地理學聯合主催の下に本年三月二十八日より四月八日までアレキサンドリア及カイロで開催され、埃及を始め英、佛、伊、白、西、和、波、希等の學者が出席した、我が國からは東大の加藤教授が派遣された。王立埃及地理學會は此の會議の世話をした。埃及王ファド陛下は開會式に臨まれ又第一夜に會議員を王宮に招待した。

會議の理學的仕事は五部に分れ、部會は午前中に開かれ論文が讀まれ、討論が行はれた、又特別講演は總會の席上で話された。クラスター中佐はマクレオド少佐に代つて百萬分一萬國圖出版に關する組織に就いて語つた。この地圖を調製する際隣接國の各の一部が一圖幅中に入る場合の協力、大都市に於ける本地圖の販賣、萬國の爲替相場が上下する爲めに中央局からの實用の分配支持等に不完全な點があることや、巴里で嘗て定めたも

のが満足でない爲めに現に各國で作りつゝあるものの様式が一定してゐない事を指摘した。而して此の事項は一九二八年に英國で開催さるべき次の會議で決定することに決議された。ジュ・フランシエールは中世紀のアフリカ發見史の研究を約説し、又コロンブスと同時に且つ彼の利用したと信ぜられる一地圖を會衆に看せた。サー・エフ・ヤングハズバンドは地理に關した著述者は記述する國の魂に入りこむ様に務めなければならぬこと、かうするには地球を愛することを學ぶによつて達せられると述べた。コレ教授はセチグア湖底の堆積層の細微な顯微鏡寫眞を示して、冬夏に出來た層の判ることを話した。ピ・ラヒエッロ師は先史埃及に關する近年の研究を發表した、師は古石器時代の種々の遺跡を發見し猶最近東方の沙漠でドルメン式の石を發見した。アルクトフスキー教授は氣象學上の有名な研究特に短かい間に起る氣溫變化の周期を決定することに就いて述べた。ジュ・マルシエリは故エフ・シュラデルの業績を稱へてシュラデルのピレニ山脈に關する驚くべき知識を大歴史地圖に就いて説いた。サディク・ペーはシナイの地質を講じた。デマンザニオンは田舎の居住及其分布に就いての討論を開き數名は之に就いて論じた。

埃及王立地理學會は地形模型、地質模型等を陳列したが殊に地質の色塗りを施したアスワン閘門の模型は賞讃を博した。

巡覽は埃及博物館、アラビア博物館、寺院殿堂、ギザ及サツガラピラミッド、デルタの尖角にあるナイル河の突堤等に行はれ、會議後はカルガ綠地、ルキゾール、アスワン等に旅行した。カイロの開閉前にアレキサンドリアで三日間費されて博物館、舊市カノプスの跡などを巡覽した。會衆は或はナイルの汽船の上で交遊したりピラミッドやモスクの尖塔の蔭に沈む夕照を賞でたりした。